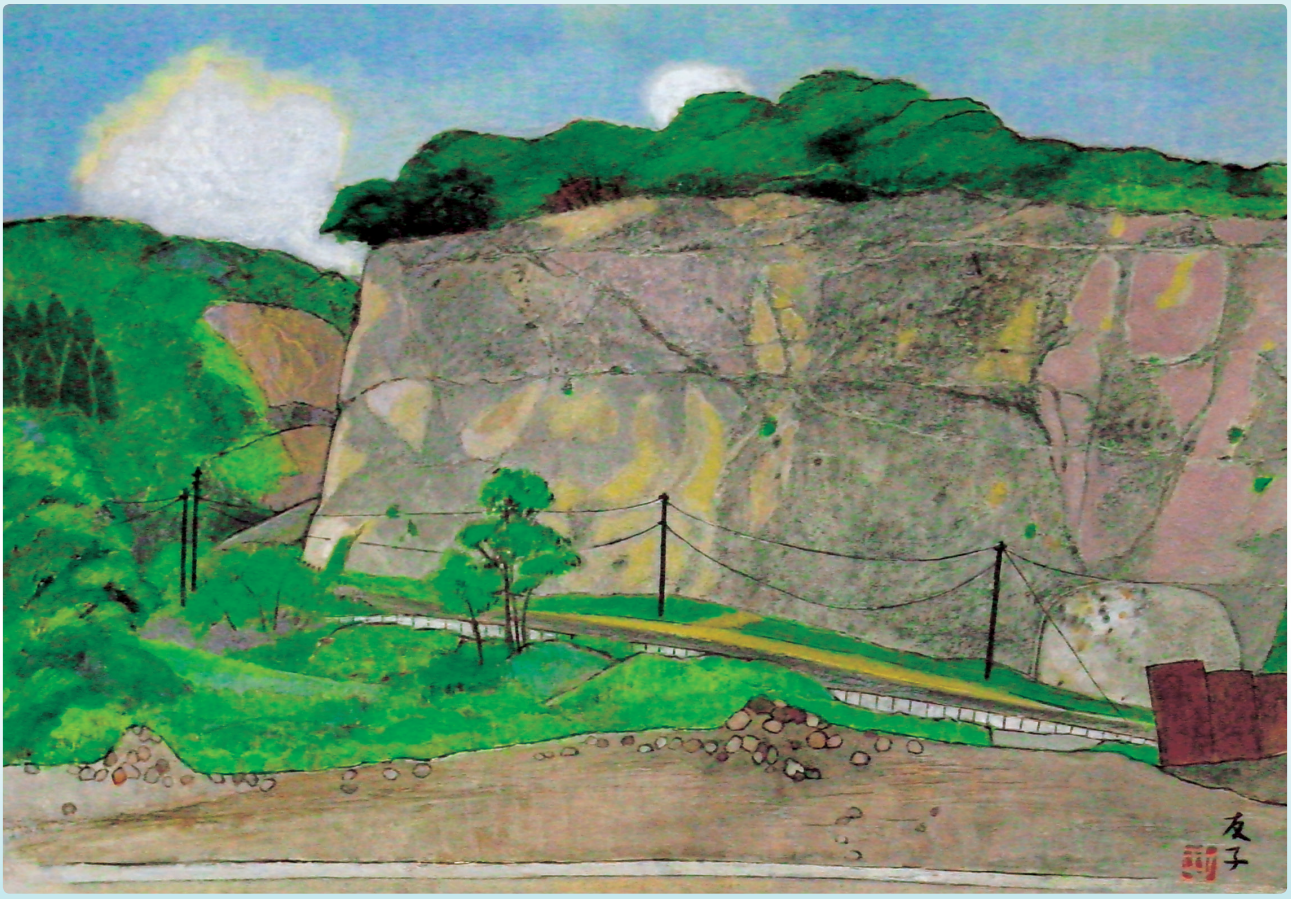
# 上州文化

contents


巻頭言／大澤正明 ②
特集 世界に二つの縁切寺／髙木 侃 ③
上野東歌探訪／北川和秀 ⑥
㈶群馬県教育文化事業団 INFORMATION ⑩
地域文化をつなぐ／宮崎英夫 ⑪
ART NOW 陶芸の魅力／本田 正 ⑫
カフェの隅から 軽やかな風／竹田朋子 ⑭

岡崎の切り通し 塩原友子


財団法人 群馬県教育文化事業団 2011 No.127

# 巻頭言

群馬県知事　大澤正明

「つる舞う形の群馬県」「日本で最初の富岡製糸」・・・。子どものころから親しんだ、群馬県民なら誰もが知ってる「上毛かるた」。多くの県民の皆さんが読み札をそらで唱えることができるのではないでしょうか。

群馬交響楽団は、終戦直後の社会を音楽で明るくしようと昭和二十年十一月に結成されました。地方交響楽団の草分けとして長い歴史を誇っています。子どもたちは高等学校卒業までに授業で四回は群響の演奏を聴くことができます。

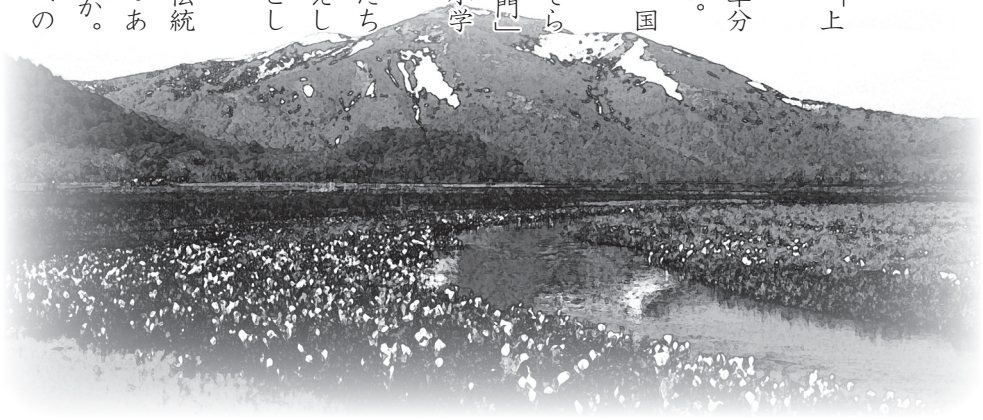
群馬には、このような素晴らしい文化的資産が数多くあります。古代の東国文化を偲ばせる古墳群や多胡の古碑、国分寺跡など多くの歴史的文化遺産にも恵まれています。

しかし私たち県民は、意外とふるさとのことを詳しく知らないのかもしれません。例えば上毛かるたの読み札はそらで唱えられても、その内容まで十分に理解をされている人は意外と少ないのではないでしょうか。「天下の義人茂左衛門」はどこで何をされた人なのか知識があやふやな人も多いのではないでしょうか。上毛かるたの副読本を作成して、小学校で郷土学習の副読本として活用していただいたり、書店で販売しているのもこうした思いからです。

現在、国内最大の観光イベント「群馬ＤＣ（デスティネーションキャンペーン）」を開催中ですが、これまで私たち自身が知らなかった群馬の魅力を掘り起こし、磨き上げることに努め、これを全国に発信して多くの観光客をお迎えしています。群馬は、温泉や自然などに恵まれておりますが、古くからある文化的資産を大切にしながら、観光資源として活用することも大切だと考えています。

地域社会の崩壊が懸念されておりますが、人々が支え合い、地域コミュニティーを育んでいる地域には、祭りや伝統芸能などの文化が息づき、「地域の絆」が生き続けています。古くから伝わる文化を守り、そして新たに根付きつつある文化を大切に育てることにより、人々が絆で結ばれた、安心で安全な地域づくりが実現できるのではないでしょうか。

私たち県民一人一人が文化の担い手となって、ぐんまの素晴らしい文化を次世代を担う子どもたちに伝え、郷土への愛着や誇りを持てる群馬の文化をつくっていきたいと思います。



# 世界に二つの縁切寺

## 井上ひさし『東慶寺花だより』を読む Ⅱ

専修大学教授・
縁切寺満徳寺資料館館長
髙木侃

### 『蚤蚊虱の大合戦』

前回は作家・井上ひさし氏の『東慶寺花だより』（文藝春秋刊）の第一話、「おせん」についてだけ読んでみました。舞台は駆け込み女の世話をした御用宿・柏屋です。そこには主人源兵衛夫婦とその娘美代、番頭の利平とその妻勝、それに遠縁で宿に居候をして番頭見習いの中村信次郎、二十三歳です。第一話では駆け込む「おせん」さんにねだられて、主人公・信次郎が出版した『蚤蚊虱の大合戦』という滑稽本の大概を話して聞かせる場面があります。

「洗濯盥が御奉行所、これが話の心棒です。その洗濯盥の御奉行所が江戸市中の蚤仲間、蚊仲間、そして虱仲間をキッと叱り置くというのが話のあらましで……」

「蚤どもの義については、近年、みだりに相成り、四季の差別なく跳び歩き、寒中より痒がらせ候段、ふらちしごくに候。とりわけ夏は短夜にせせりおこし、たびたび寝不足に陥れ候段、わがままなることに候。前まへから相触れ候ども、足早に跳び歩き、畳のへり、あるいは敷合はせなどにかげを隠し候こと、けつしていたすまじく候。もし右の者どもこれあるにおいては、さっそく指先にて押へ取り、木枕の上にてパッチリといはすべきものなり。……」

こんな塩梅で話は始まり、蚊・虱にも奉行所からの触れが出されますが、それに対して、三者三様の返答（抗弁）がなされます。作家・井上氏がこの話の素材にしたのは、明治三十四年　博文館発行、帝国文庫（続）『万物滑稽合戦記』と思われますが、その底本は馬喰町三丁目吉田屋小吉板だろうと推測されます（筆者は杏雨書屋本によって確認しました）。別に一部内容の異なる謙堂文庫本があります。その江戸時代の版本によって、返答書の蚤の部分をみましょう。

『むし仲間往来』中扉（謙堂文庫本）

蚤仲間の義は、むかしすにん天皇の御宇角力にめし出されたる出雲の国のぢうにん野見のすくねのばつようにて御座候、むかし四月にすまふ御ゑいらんこれ有候、そのゑんにより蚤の四月と御めんをかふむり、それより秋のころ迄きせん上下のへだてなくとせい仕候へ共、一切ごうよくなる義は不仕候ニ付、あと跡のさはり少しもこれなく候に、ちかごろ諸人のみ取と申道具をこしらへ、とりもちをもつてわれ仲間のもの共からめ取られ候段千万なげかはしく存候、此義を御さしとめ下され候はゝ、以後は長どうりうも不仕、夏季ばかりとせい仕候、なを又きるい御ふるひのせつきつとたちのき可申候

見事な抗弁です。営業禁止の触れに対して、一番の難物「とりもち」を差し止めくだされば、夏だけの営業にするといっていいます。この論理的な抗弁の

様子が、日常の「御上」（支配者）に願書をしたためるときの参考になったものとみえ、当時の村役人層に好んで筆写されて流布されています。福井県『小浜市史』にみられるほか、筆者所蔵の筆写本も、地域は信州筑摩郡、出羽由利郡、佐渡羽茂郡、上州甘楽郡のものなどがあります。いずれにしても井上氏の引出しの多さと引用の面白さには舌を巻きます。

## 妾おぎんの駆け込み

ひきつづき離縁状研究者としての立場から、本書を読みましょう。

第二話の「おぎん」は江戸両国の薪炭問屋・堀切屋の御隠居の妾で、駆け込み後、御用宿松本屋の世話で入寺したのです。そして、在寺している青松院で、血を吐いて伏せることになります。東慶寺は男子禁制の尼寺ですから、男の町医者は論外、わずかに円覚寺の僧医・清拙御尚のほかは、中門から奥には入れません。ところが、あいにく清拙御尚は、腰を痛めて歩行もできず応診ができません。そこで、江戸蔵前の西沢佳庵先生のもとで八年間修業した信次郎が代診することになります。実は「おぎん」はかつての許婚（いいなずけ）・朝吉（奈良で錺職（かざりしょく）の修業をおえて帰ってきたのです）と結婚を願って、二の腕を簪（かんざし）で傷つけ、口に含んで喀血したように見せていたのでした。信次郎の診断の結果、労咳ということになって、柏屋に宿下がりして、養生することになります。結局は御隠居を説得して寺法離縁が成立ということになる話です（寺法離縁になるか否か、つまり示談の離縁になれば在寺する必要はないので、御用宿預けのはずで、この点は歴史的事実とは異なりますが、小説としてはこの方が面白い）。

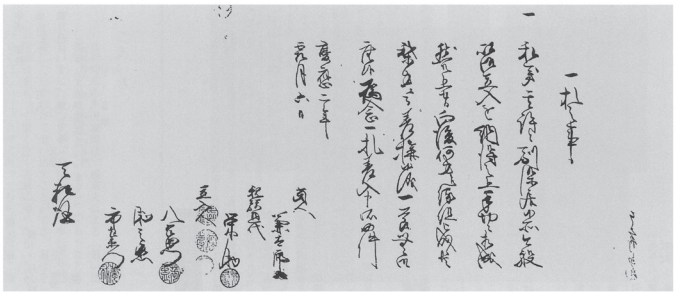
ここで問題なのは、東慶寺で妾の離縁は扱ったのか。小説では、信次郎がそのことを主人・源兵衛に聞くと、

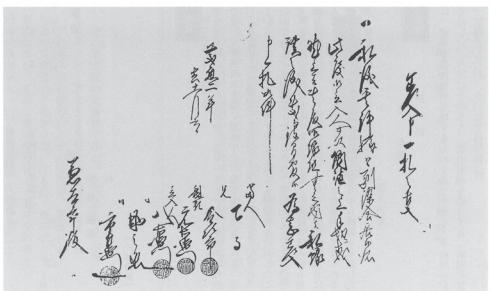
「それがりっぱに扱うのさ。やむにやまれず離縁を申したてる女（ひと）たち、そういった女たちを助けるのが、東慶寺さまのお仕事、そして御用宿の者の務め。夫と離縁したい女であれ、旦那と離縁したい女であれ、一切差別はしないのだ」

「この利平がこちらにまいってかれこれ四十年になりますが、この柏屋だけでも二十件は、妾離縁を扱っているはずですよ」

満徳寺では、本妻同様の妾の離縁を扱い、年季二十五月の半分十二ケ月半で、離婚し下山できる「半限抱え」の制度がありました。実例として、文政七（一八二四）年四月安房国長狭郡天面村（現・千葉県鴨川市）の「みゑ」の年季明けお声掛りの事例があります。この駆け込みは、もっとも遠隔地からの事例でもあります。

では東慶寺ではどうだったかといえば、わずかに慶応二（一八六六）年十一月に兼太郎から妾「てる」にあてた離縁状と、「てる」から兼太郎にあてた返り一札が東慶寺旧蔵文書、すなわち小丸文書の中にあります。離縁状文面に「馴染居候」ところ、「手切ニ相成」とあり、これが妾の離縁状の常套文句ですから、「てる」が妾であることは間違いなく、しかも文書の裏の端に「てる一件書面」と書かれてあり、これは駆け込みと考えられ、小説ほど多くはなかったにせよ、東慶寺でも妾の駆け込みを受容したのです。





上：「兼太郎―かね」離縁状
下：「かね」離縁状返り札

## 先渡し離縁状―おはま・おゆき

第九話。残暑きびしいころ、鎌倉のやぐら見物にきたという男客・治助が四、五日厄介をかけますとやってきた。宿帳には「江戸霊岸島川口町　穴蔵屋治助　三十八歳」としたためてあります。穴蔵屋とは、お金持ちのお屋敷の地面や床下に穴を掘る仕事だそうで、明暦の振袖火事のとき、穴蔵に呉服物をしまっておいた呉服問屋だけが損害を被らず、それが評判で、こぞって穴蔵をしつらえるようになって仕事に困らないという話でありました。到着した

早々、やぐら見物と称して出かけますが、やぐらには興味もなく、円覚寺の山門の前に腰をすえて東慶寺を眺めているだけでした。女房「はま」が東慶寺に駆け込むのを見張っていたのですが、西から来るものとそちらばかりを見ていたら、鎌倉、東のほうから来て、まんまと駆け込まれてしまいます。

じつは治助夫婦は官刻の『孝義録』にも掲載された、評判の「孝行穴蔵屋」といわれていたそうで、一例をあげれば、朝方から雨雲が垂れ込めていたある日、父は雨になるから高下駄で行け、母はあとで晴れるから草履になさいといい、たがいに譲ろうとしない。そこで両方を立てるために、片方に高下駄、もう片方に草履を履いて出かけたのでした。これほど馬鹿正直な親孝行でした。女房の駆け込み理由はといえば、去年治助の両親が相次いで亡くなった。ところが、布団の中に両親の位牌を持ち込む有様、そこまでは辛抱できましたが、「はま」の母（兄夫婦と幸せにくらしている）を引き取ろうとします。ことほどさように治助は夫婦のあいだに親を持ち込まないではいられない人、これでは生涯、親孝行ばかりで、一生がめちゃくちゃ、というのが「はま」の言い分。しかし、二人とも心底から嫌い合っているわけではなさそうと見て取った御用宿の主人たちは顔を見合わせて異口同音に

「……先渡し離縁状」

そこで、つぎの三くだり半の文案をしたためる。

一札之事

一　此ノ先、治助事、再ビ親孝行ヲ致シ候節ハ、おはま義、何方エ縁付キ候共、少モ構無御座候、為後日一札仍テ如件

文化七年庚午文月末日　　穴蔵屋治助

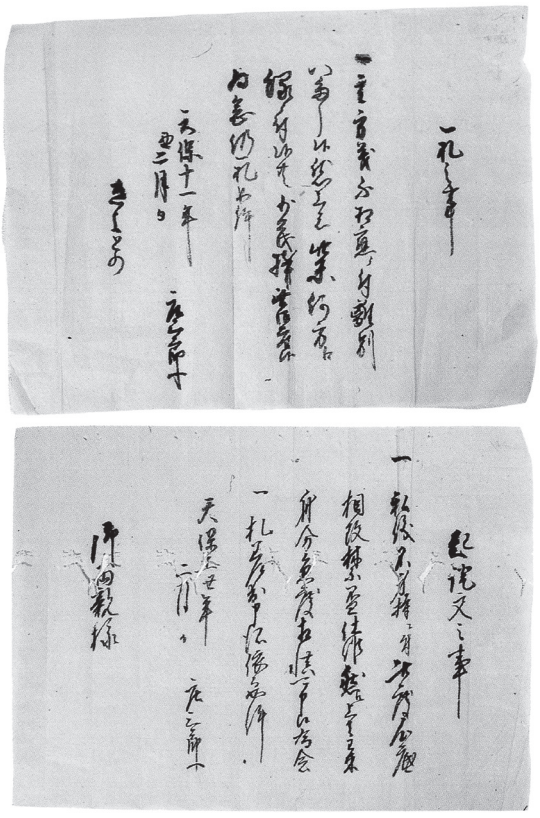
おはまどの

このように妻方に離婚権を留保して、あらかじめ渡された離縁状を「先渡し離縁状」と称します。この学術用語は筆者が『三くだり半』（平凡社）のなかで創った造語で、多くは復縁するときに夫から交付される（ときに妻方が奪い取る）ものですが、婚姻前（婚約時）に受理することすらありました。

第十三話、「おゆき」では、酒を飲むと正気を失う夫に「先渡し禁酒離縁状」を書かせ復縁します（当時は帰縁といいました）。実例があります。上が先渡し離縁状、下が禁酒起請文（誓約書）です。庄三郎は「私儀、不身持ニ付、此度心底相改、禁盃仕候」と禁酒を約束した上で、妻を迎えにきます。「ゆき」の両親は何度か禁酒の約束を反故にしている娘の夫（婿）に今度違約したら離婚でいいか、と念を押します。庄三郎はやむなく先渡し離縁状を妻の実家に預けて復縁するわけです。天保十一（一八四〇）年二月、上州新田郡牛沢村（現・群馬県太田市）の事例です。

井上氏はこの「先渡し離縁状」が気に入ったようで、学問的成果をたくみに活用して小説を興味ふかいものにしています。それにひきかえ筆者の文章は、衒学的嗜好に偏ったきらいがあります。おゆるしください。まだ氏の小説にはいろいろ論ずべき点がありますが、とりあえず終了します。

謹んで井上氏のご冥福を祈ります。合掌。



上：先渡し離縁状、下：禁酒誓約書（神谷忠朝氏所蔵）


**髙　木　侃**（たかぎ・ただし）

【プロフィール】

1942年生。中央大学大学院法学研究科修士課程修了後、関東短期大学教授をへて、現職。国際日本文化研究センター客員教授等歴任。満徳寺の研究で法学博士。主要著書に『増補　三くだり半－江戸の離婚と女性たち－』（平凡社ライブラリー）、『縁切寺満徳寺の研究』（成文堂）、『三くだり半と縁切寺－江戸の離婚を読みなおす－』（講談社現代新書）などがある。

# 上野東歌探訪

北川和秀　一九五一年生。学習院大学大学院人文科学研究科国文学専攻博士課程修了。同大学助手を経て、一九八五年群馬県立女子大学文学部専任講師。現在は同大学教授。専門は上代文学。主な著書に『続日本紀宣命　校本・総索引』『群馬の万葉歌』など。

本連載ではこれまで伊香保、多胡、佐野の歌を取り上げてきた。これらはいずれも群馬県の西寄りに位置する地である。そこで今回は東に目を転じて新田郡の歌をよむことにした。取り上げるのは次の二首である。

◎新田山嶺には着かなな吾によそり端なる子らしあやに愛しも（三四〇八）
◎しらとほふ小新田山の守る山の末枯れせなな常葉にもがも（三四三六）

一首目の歌によまれている新田山と、二首目の歌によまれている小新田山というのは同じ山で、太田駅の北に位置する金山のことであるとされる。歌の解釈に入る前に、まずはこの山について述べる。

## 一、新田山について

「新田山」の「新田」という山名は、上野国新田郡の郡名に由来するのであろう。連載の第一回目（『上州文化』一二二号）で述べたように、東歌が万葉集巻十四の編者の手もとに集められたとき、それらの歌は、すでにどの歌がどの国のものであるのか分からない状態になっていたらしい。巻十四の編者は、一首一首の歌によみ込まれている地名を手掛かりに、歌を国別に分類していったものと考えられる。「新田」という郡名は、上代には上野国の他に陸奥国にもあった。陸奥国の新田郡は現在の宮城県中部に位置し、蝦夷に備えた軍事拠点として新田柵が置かれていた。新田山をよんだ二首に「上毛野」という国名は含まれていない。それにも関わらず、これらの歌が上野国の部に排列されているのは、巻十四の編者が何らかの根拠をもってそのように判断したからであろう。その判断の根拠は分からないが、これらの歌を陸奥国の歌と考えるべき積極的な理由も見当たらないので、編者の判断を尊重し、これらの歌の新田山は上野国の新田郡に所在するものと考えることにする。

新田山という山名が郡名を負っているからには、この山は新田郡のシンボル的な山なのであろうと推測される。

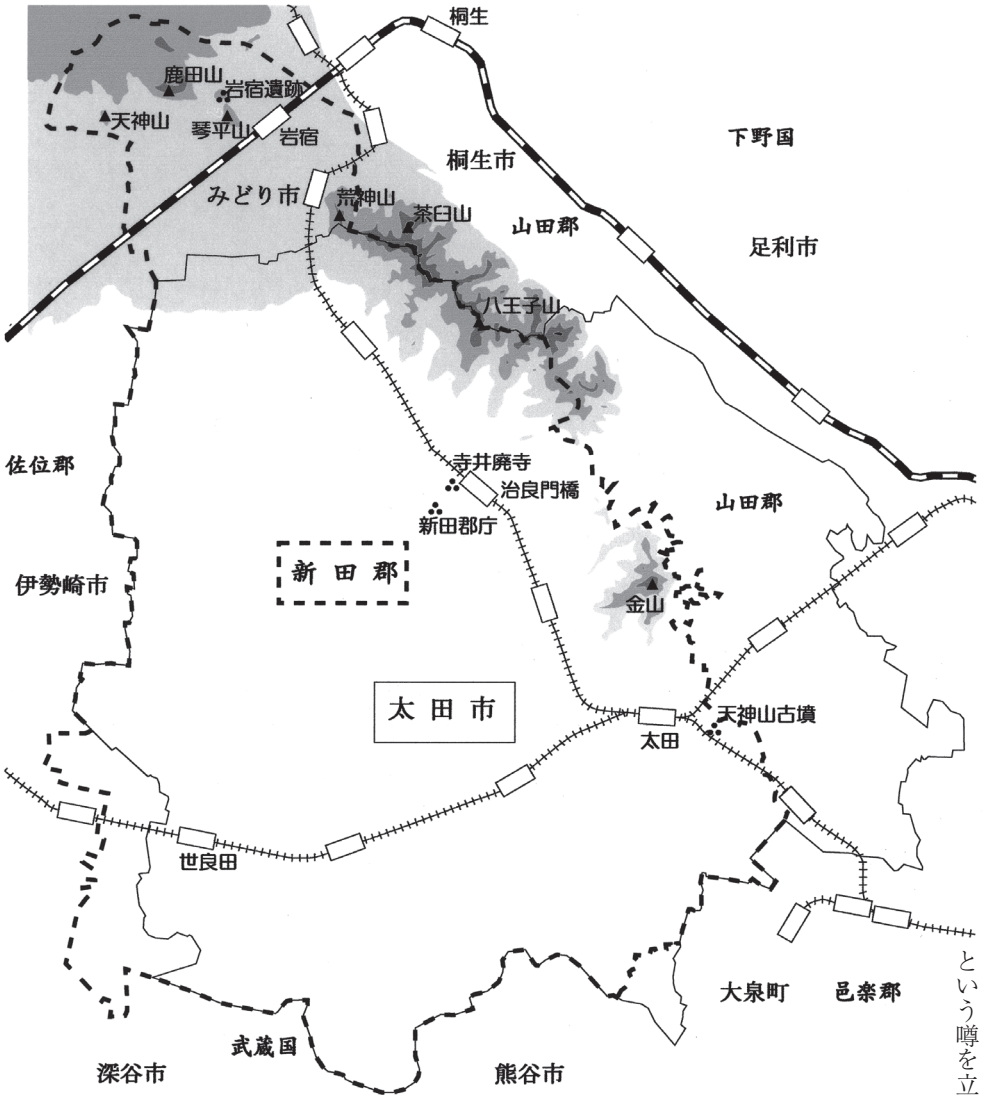
新田郡の地図を示す。太めの点線で示したのが新田郡の郡域、細めの実線で示したのが現在の太田市の市域である。新田郡の郡域は江戸時代初期のものを推定して示した。できれば上代の郡域を示したいところであるが、具体的な線を引くに足るだけの資料が残っていない。地図の郡域は参考としてご覧頂ければと思う。新田郡の範囲は現在の太田市の範囲とかなり重なり合う。太田市のうち東部と南東部（古戸町）とを除き、みどり市の南部（旧笠懸町）と伊勢崎市の南東部（旧境町の東部）とを加えた範囲がほぼ新田郡の郡域となる。

郡域の大部分は見渡す限りの平野である。丘陵地は、北東の山田郡との境界を構成する部分、太田駅北方の金山、旧笠懸町地域などである。いずれも郡の周辺部であるが、その

新田郡庁跡

中で金山は平野部に存在する独立峰としてよく目立ち、郡名を負う山として最も可能性が高そうに思われる。

なお、地図にも示した新田郡庁跡は、近年の発掘調査で敷地の範囲や建物の配置などが明らかになった遺跡である。今日までに発掘されている全国の郡庁の遺跡の中で最大規模のものであり、平成二十年に国の史跡に指定されている。東武鉄道の治良門橋駅から徒歩十五分ほどの場所である。現在、そこからは、建物に障られて金山は見えないが、奈良時代にはよく見えたことであろう。




## 二、「新田山」の歌について

新田山嶺には着かなな吾に寄そり端なる子らしあやに愛しも（三四〇八）

尓比多夜麻　祢尓波都可奈那　和尓余曽利　波之奈流児良師
安夜尓可奈思母

新田山がどこの山並みとも連なることなく孤立しているように、私と親しいという噂を立てられて、端の方にぽつんといるあの娘が、なんともいとしくて

北西から見た金山

ならないことよ。

「嶺には着かなな」は、他の嶺々とは連続しない、ということであろう。新田山を金山と考えた場合、金山はそれ自体が複数の嶺から構成されてはいるものの（写真参照）、その全体を一体のものとみれば、金山北方の丘陵地帯とは完全に切り離されて、平野の中にぽつんと孤立して存在している（地図参照）。「嶺には着かなな」という表現からも、新田山は金山のことと見たい。

「なな」は、「～せずに」の意。上の「な」は打消の助動詞「ず」の古い未然形である。打消の助動詞「ず」の活用には「ず」（連用・終止）と「ぬ・ね」（連体・已然）というザ行とナ行とが混在している。「な」はナ行の系列の未然形で、上代に見られる。上代には連用形の「に」、終止形の「ぬ」も用いられており、古くはナ行四段型の活用であったと考えられる。

| 未然 | 連用 | 終止 | 連体 | 已然 | 命令 |
|---|---|---|---|---|---|
| （な） | ず（に） | ず（ぬ） | ぬ | ね | |

「なな」の下の「な」は上代東国語の助詞で、「に」と同じ。従って、「なな」は「～せずに」の意となる。こうした「なな」は万葉集に全部で七例見える。内訳は上野国東歌二例（二例とも今回扱う歌である）、国名不明の東歌二例、武蔵国防人歌二例、昔年の防人歌一例である。すべて東歌・防人歌であり、東国特有の語形であったことが知られる。

「寄そる」は、ある人がある異性に心を寄せていると噂されること。万葉集中の次の歌などが参考になる。

春山の馬酔木（あしび）の花の憎からぬ君にはしゑや寄そるともよし（巻一〇・一九二六）

＊春の山の馬酔木の花のように心惹かれるあなたとならば、いいさ、噂を立てられたって構わない。

「端（はし）なる」は「端にいる」。これを「中途半端に」「どっちつかずに」とする注釈書が多い。しかし、「はし」の語義は、中心から離れた部分、入口付近、周辺部ということであって、「中途半端」や「どっちつかず」という意味に解し得るかどうか疑問である。「はした」であれば確かに「中途半端」や「どっちつかず」という意味であるが、「はし」と「はした」とは区別して考えるべきものと考える。

「あやに」は、驚嘆を表す感動詞「あや」（「怪し」と語源を同じくする語）に助詞の「に」が付いたもので、「ふしぎに」「言いようもなく」「むしょうに」という意。万葉集にはこの語を用いた歌が、東歌・防人歌に一一首、それ以外の歌（基本的に中央の人々の歌）に一九首見える。その用法は、東国と中央とで相違しており、東歌・防人歌では「あやに愛（かな）しき（愛しも等を含む）」という用例が一一首中七首を占めるのに対し、東歌・防人歌以外では「あやに畏（かしこ）し（畏き・畏み等を含む）」という用例が一九首中一〇首を占めている。東国の歌には「あやに畏し」とうたうものは一首もなく、中央の歌には「あやに愛し」とうたうものは一首もない（「あやに悲し」ならばある）。この語は、中央の歌では、挽歌を初めとする宮廷儀礼歌によく用いられ、「あやに畏き」や「あやに貴き」など荘厳な様子を形容するのに用いられている。その同じ語が、東国では相聞歌の中で異性を思う気持ちの強さを表すために用いられているのであるから、これはだいぶ趣が違う。東歌・防人歌において特徴的な用法を有する語の一つとして指摘することができよう。

この歌の全体的な解釈としては、先に示したように、新田山が他の山並みと連なることなく孤立しているのと同様、私との仲を噂されて孤立している彼女がいとおしい、という風に理解した。この解釈では、「新田山嶺には着かなな」が「吾に寄そり」を飛び越えて、「端なる子ら」に掛かっていることになり、その点がやや引っ掛かる。別の解釈として、「嶺（ね）」は同音の「寝」と掛けているととって、「（新田山が他の嶺と連ならないという「嶺には着かなな」ではないが）私と寝たわけでもないのに、寝たと噂されて～」と解する説がある。この解釈の方が、「嶺には着かなな」の掛かり方としては順直であるが、その一方、男女が共寝をすることを「寝に着く」と表現した例がないことが問題となる。それらを総合的に考えて、先のように解した。さらに検討してみたい。

## 三、「しらとほふ」の歌について

しらとほふ小新田山の守る山の末枯れせなな常葉にもがも（三四三六）

志良登保布　乎尓比多夜麻乃　毛流夜麻乃　宇良賀礼勢奈那
登許波尓毛我母

新田山の、大切に守られている山の木々のように、葉が枯れることなく、いつまでも青々と茂っていてほしいものだ。

「しらとほふ」は「小新田山」にかかる枕詞と思われる。語義・かかり方ともに未詳。『常陸国風土記』新治郡の条に「風俗の諺に『白遠ふ新治の国』と云ふ」という文がある。これも同じものと考えて、両者に共通する要素に注目すると、この枕詞は「小新田山」に掛かっているわけではなく、「新」に掛かっているとみるべきであろう。雄大な様を表す形容詞に「とほしろし」という語がある。「しらとほふ」はあるいはこの語と関係するかもしれないが、よく分からない。これも宿題としたい。

「小新田山」は新田山と同じ。「小」は親愛の情をあらわす接頭語。同様の例は少ないが、万葉集には「小筑波」（三三九四・三三九五・三三九六）、「小泊瀬山」（三八〇六）などの例がある。

「守る山」は、樹木を保護・管理して大切に守っている山。「小新田山の」の「の」は同格。すなわち「小新田山」イコール「守る山」である。「末枯れ」は葉の先端が枯れること。「なな」は前の歌にも用いられていた。そこで述べたように、「～せずに」の意。

「常葉」は、冬でも枯れない常緑の葉のことで、発音は「とこは」。似た語に「常磐」がある。この語は「とこ（常）＋いは（岩）」がつづまってできた語で、永遠に不変の頑丈な岩を意味し、発音は「ときは」。両者は元来別語であったが、「常磐」の方は、原義から転じて「永遠不変」という意味でも用いられるようになり（たとえば「大君は常磐にまさむ」四〇六四番）、さらに常緑樹についても用いられるようになって（たとえば「常磐なる松のさ枝をわれは結ばな」四五〇一番）、「ときは」が「とこは」に取って代わるに至った。

この歌は譬喩歌の部に収められているので、表の意味の他に裏の意味がある。裏の意味の方が作者の言いたかったことである。先ほどの口語訳には表の意味を載せた。裏の意味は、「小新田山」は女性の比喩で、「大切に守られているあの娘はいつまでも若々しくあってほしいものだ」ということであろう。

「もがも」は、その実現に疑問を抱きながらも実現を願う語で、他人の身の上についての願望を述べた「川の上のゆつ岩群に草生さず常にもがもな常処女にて（川のほとりの神聖な岩の群に草が生えないように、いつまでも変わらぬ乙女でいて欲しい）」（二二番）という例も、自分自身の身の上についての願望を述べた「岩戸破る手力もがも手弱き女にしあればすべの知らなく（墓の岩の戸を壊す手の力が欲しい。私は力の弱い女であるので、どうしたらよいのか方法が分からないことだ）」（四一九番）という例もある。

「小新田山」を女性の比喩ととらなければ、「自分自身がいつまでも若々しくありたいと願う」、「二人の仲がいつまでも変わらないようにと願う」という解釈も可能ではある。しかし、東歌に「譬喩歌」として分類されている歌の内容を見ると、いずれも恋の歌であるので、この歌を「自分自身がいつまでも若々しくありたいと願う」ととるのは少し無理があるように思う。また、「新田山」に親愛の情を表す「小」を付けて呼んでいる点、この山を「守る山」と言っている点からも、「小新田山」は女性の比喩ととりたい。

載せた写真は、金山の南麓にある万葉歌碑で、今回取り上げた二首の歌が刻まれている。金龍寺の前の舗装道路を少し登った右側にあるが、舗装道路に面してはいないので、やや見つけにくいかもしれない。

金山万葉歌碑

**「小中学校伝統芸能教室」**を７月19日（火）に「草津音楽の森国際コンサートホール」で開催しました。参加した草津町立草津小学校のみなさんから、楽しい感想文が寄せられましたので紹介します。

---

■ 最初に三味線を見せてもらいました。三味線でわかったことは、糸が、三本しかないことです。音をだす三角形のようなものでひいて、ゆびでおさえて上に動かしたり下に動かしたりしていました。さくらさくら（６年）はきものや、いしょうがきれいでした。ししまいは、悪い運などを食べてくれるんだなと初めてしりました。さらしは「ゆかにつけちゃだめなんだ」と思いました。（５年男子）

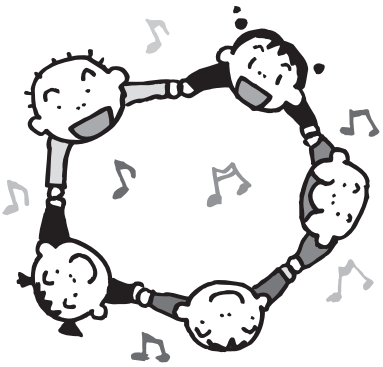
■ 楽器の特徴やちがいなども色々楽しかったです。同じ学年の友達が着物やかつらなど変身していてびっくりしました。楽器をしていたり唄をうたっている友達もいてすごいと思いました。江戸の娘は着物がごうかでかざりもかわいくて特にすごいなあと思いました。
（６年女子）

■ ぼくは、山彦の役として登場しました。初めは大変そうだなと思いましたが、それほど難しくありませんでした。一番すごいと思った所は、神代の時代の服が、今のような服とほぼ一しょだったからです。一番きつかったことは、メイクをおとす時です。目のまわりやアゴにメイクをつけたのがとりずらかったです。でも、楽しかったです。（６年男子）

■ 江戸時代・明治時代・現代の服は、写真や教科書で見るより、実際にぶたいのうえなどで見た方がきれいだなと思いました。るなちゃんやゆまちゃんやななみちゃんなど着物を着た人や、小つづみや大つづみを演奏した人たちがとてもかっこいいと思い、わたしもやってみたくなりました。「ふじむすめ」は、手の動き方や、体の動かし方がとてもなめらかで、おもわずうっとりしてしまいました。「えちごじし」では、たいこをポンポンとまっすぐできれいな音でうちながら、てきぱきとおどるのはとても難しそうなのに、それを簡単にやってしまうところがすごいなあと思いました。（６年女子）

※「小中学校伝統芸能教室」は小中学生に人形芝居及び邦楽（日本舞踊）の鑑賞、体験の機会を提供することにより、日本古来の伝統文化、伝統芸能への関心を高め、豊かな情操を養うことを目的として、事業団が主催している文化事業です。

# 地域文化をつなぐ



文化協会
会長　宮崎英夫

## つまごい

嬬恋村は、明治二十二年に十一ヶ村が合併して今の嬬恋村となった。当時合併について県知事、佐藤興三氏に請願書を提出された。知事としては三原村とすべきと指示がありました。しかし村の総代は、今般町村分合儀に付、御諮問によれば、新名は三原村とこれ有り候処。私共村々の儀は、日本武尊の古歌により新名は嬬恋村と仕り度、此の段連署を以て上申候也。吾妻郡今井村惣代唐沢利三郎外十四名が連名にて知事に提出した。村々には多くの文化人がいたことはたしかであり、日本古典文学大系で万葉集の中に「つまごい」ということばが使われている作品一首があるといわれ、春の野に餌を求めてあるく、きじが妻を恋うて鳴いて、自分の在りかを人に知らせている。この古歌を参考にしたことはたしかではないが？　嬬恋の字を、なかなか読んでくれない。広辞苑によると「よわい」とか「そばめ」とあり貴人の側近に仕える女、本妻以外の妻とある。それにしても先人が諸願を重ねて選んだ「つまごい」村は山河豊かなわがふるさとにピッタリの他に誇れる村名であると思っている。

明治大正と本村にも、村芝居が流行し、素人歌舞伎や浄瑠璃の公演で自選他選の役者が村々のかけ舞台で山村のレジャーを楽しんでいたという。

近代では連合青年団の自作自演の演劇で全国青年祭に於ける最優秀賞を取るなど、県内に金字塔をうち樹てたことは特記に値する。音楽の面では全村皆唱運動の指定を受け、昭和三十八年音楽モデル県大会に婦人会を中心に三〇〇名が参加した。これも県社協の指導があったからにほかならない。又昭和二十七年から今年まで、レクリエーション指導で若妻会、婦人会を継続してお世話いただいている県の飯塚ツヤ子先生には敬意を表している。

文化協会の発生の始動については、昭和五十年県教委による群馬県教育研究所が成人の学習要求と生活意識を調査した。その結果「文化協会のような

もの」の創設が好ましいと指摘され私の友人で長く指導いただいた県教委の石内巌青少年課長から前橋市で文化協会創設されつつあると聞き、当時の社教指導員唐沢重夫先生、社教委員議長の安斉光男に相談し設立の方向で事を進めることができた。根廻しができれば仕事は速い。会則審議、役員の人選もスムースに進み発会のはこびとなりました。会長を織田武が当り昭和五十一年三月十五日設立総会が嬬恋会館で行われました。設立以来三十五周年、村の行政方針はもとより、「なげかけることばに　ほほえみを　さしだすその手に　ぬくもりを」の村民憲章の精神に基づき、村民一人一人が文化協会の会員であることから村の教育行政理念及び基本方針による二十一世紀に生きる心豊かな村民の育成を目指す生涯教育の一翼を担ってきたように思います。

# 陶芸の魅力

私の住んでいる藤岡市は、千三百年以上続く瓦の産地です。私の父も鬼瓦作りの職人でした。一般的な屋根に葺かれている瓦でも数種類の瓦が使われていますが、ほかの瓦が窯元で作られ焼かれるのに対し、鬼瓦は、焼く前の素地の状態で職人の家から窯元に納められます。窯元を瓦屋、私の家は鬼瓦家と言われていました。鬼瓦屋の細工場で粘土遊びをしていた息子が陶芸の道に進んだのは自然なことのようであり、また、体に流れる血の歴史といったようなものを感じます。

古代の人間が焚き火をし、火の消えた後に灰の下で固まった土を見つけたことから土器作りが始まりました。おそらく初期には器ではなく動物や人の形を焼いていたのでしょう。なぜなら土で器を作るには高度な技術が必要ですが、土の固まりに手足をつければ形になる土偶のほうがよほど簡単だからです。ひょっとすると初めにそれを焼いたのは子供かもしれません。焚き火の周りで遊んでいた子供が粘土で人形を作り、何かの拍子に火にくべて土偶が焼きあがった。

粘土で物を作るのは大変楽しいことです。手に取ったそれは最初はひんやりと冷たく、力を加えると指紋の中に入り込み、放すと指紋をうつし、加えられた力の形を残します。そうやって何度か形を変えている間に手のぬくもりまでも吸い取って温かくなり、その頃にはただの土塊も作者の意思が伝わって何らかの形を成していくのです。

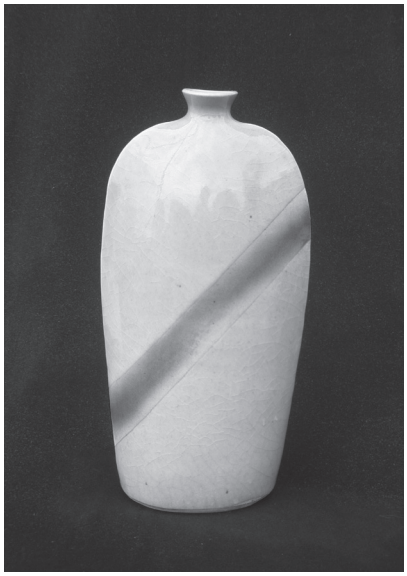
偶然に生まれてくる形であれ、意図して生まれた形であれ、手を動かしている間に見つけだされた形はやきものにおいては火によって焼かれることで完成します。現在の陶芸の工程も大きく言えば古代のそれと変わりはなく、またその喜びも変わりません。陶芸の魅力とは誰もが感じられるものであり、何万年もの間持ち続けてきたものなのです。

現在は文明の発展とともに陶芸の技術、社会の中での役割、位置づけも複雑なものとなっています。陶芸の制作上最も特徴的な性質が粘土の可塑性（粘り気）でしょう。この可塑性があるからこそ様々な形が生まれ、特異な造形方法が発達しました。その代表がロクロ（轆轤）成形です。これは器を作るのに大変便利な方法で、成形のスピードを速め、同じ形のものを数多く作ることに適しています。この発明が陶磁器の量産に大きく貢献しました。ただロクロを使いこなすには熟練が必要です。電動ロクロを使い、可塑性の強い良質の粘土を用いたとしても均一な厚みで良い形を挽く（ロクロ成形を「ロクロを挽く」といいます）ことができるようになるには、三年から五年は修行しなければならないと云われています。大物作りをするとき、例えば壷などを挽くときは二十キロ程の粘土をロクロに載せ、精神統一をし、土の真ん中を拳骨でたたき、できるだけ深く窪ませます。次に両手に水や泥をたっぷり付け、回転しているその輪の形を整えたら、輪の底に近いところを両手の拳骨で強く挟み、息を止め一気に引き上げます。これを三度ほど繰り返し、土が筒状になったら内側から徐々に膨らませて、最後の口作りをして作業が終わります。もちろん水が付けば溶け、手から逃げようとするグニャグニャの物体を引力に逆らって成形するのですから、ここまで来るのは容易なことではありませんが、大壷を形よく挽き上げたときはとても気持ちのよいものです。成形された粘土は乾燥、仕上げなどの様々な工程を経て窯に入り、焼かれて初めて石やガラスに近い硬さを得、陶器や磁器になるのです。

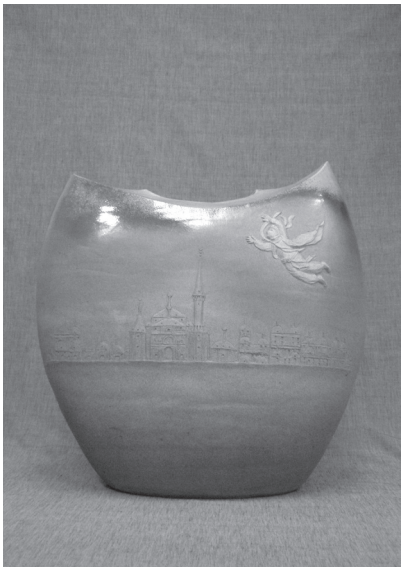
焼成はとても心が高揚します。それはそれまでの苦労の結晶の仕上がりを想像し、また炎を見ていると原始の本能が沸き起こるからだと思います。特に薪窯の焼成で、闇夜に轟々（ごうごう）と窯の吹き出す炎を見ているときなどは、現在とは違う空間に入り込んだような不思議な感覚になります。

焼成は神秘的なもので陶芸の一番の醍醐味です。千二百五十度以上にもなる窯の中では複雑な化学変化が起き、時には思いもよらない色が出たりします。慎重に意思を込め、持てる技術のすべてをつぎ込んだ作品は窯の中で炎に包まれてからは、作者の手を離れ原始の力に託されるのです。そうして出来上がっ

陶人形ピエロ



青磁花瓶月光



レリーフ壷　月の世界

た作品は想像どおりならよかったと胸をなでおろし、想像以上のでき映えならばその喜びは言うまでもありません。

しかしこの神秘が作者に大きな問題を投げかけます。よい作品ができたとして、また同じものを作ろうとしても、デザインどうりの

作品を作りたくても、ガスや灯油の窯、デジタル温度計を使ってさえ、天候や窯の中の炎の走り方に焼き上がりが左右されてしまうので、似たものはできても同じものはできません。絵や彫刻、他の工芸品では制作と完成は連続し、一本の線の上にあるといえるでしょう。しかし陶芸においては、焼成という最後の工程で途切れてしまうのです。陶芸とは芸術でしょうか。芸術の定義が「作者の意思と行為によってのみ表される」とするならば、陶芸は完全な芸術ではないといえますし、工芸が完璧な仕上がりを目指すのであればその中におさまりきれないのは明らかです。

この曖昧さが陶芸を芸術からも工芸からも独立したもののように社会に受け入れさせ、陶芸というひとつのジャンルをつくっているように思えるのです。そして私の答えとして、作陶は私の自己表現の手段であり、創作が喜びなのだから私の陶芸は芸術をめざそうと思います。

私は、デザイン学校で学び、陶器の代名詞「せともの」の瀬戸で七年間修行しました。師匠は多くを語らない人でしたし、こちらとしても恐れ多くてあまり言葉では教えられませんでしたが、師から学んだ創作に対する姿勢といったものが今の私の作陶の基礎になっていると思います。独立してから数年たった頃制作に行き詰まりを感じ、どうしたら新しいもの、自分らしいものができるのかと助言を求めたとき、「何も考えずに土が教えてくれるまで土にむかえ」と言われた事などが心に残っています。

物を作ることを仕事にしていると、視野を広くしいろいろな経験をするということがいかに大切かよくわかります。外国で見たもの、絵画や演劇、音楽などそれらすべてがいつか作品に生かされる日を待っています。年代や職業を超えて多くの人々とかかわりを持てるのも私がものづくりだからこそだと思います。私にとって陶芸は生活の糧であり、社会とつながる接点です。私にとっての陶芸の魅力を作品を通して多くの人に伝えることができれば幸いです。


藤の丘 美夜之窯（みやのがま）　**本田　正**

昭和 34 年　藤岡に生まれる
昭和 55 年　東京デザイナー学院陶芸科卒業
昭和 56 年　愛知県窯業職業訓練学校卒業
　　瀬戸市　加藤元男先生主催の美夜之窯に入る
昭和 62 年　ヨーロッパ遊学
昭和 63 年　藤岡に開窯
　　以後　個展、グループ展など毎年開催
平成 13 年　高崎髙島屋アートギャラリーにて個展
　～
平成 23 年　高崎髙島屋アートギャラリーにて個展

群馬県陶芸協会、群馬県作家協会　会員

# カフェの隅から

## 軽やかな風

竹田朋子

夕食後のひととき、夫は、ガムテープで繕ったうちわでのんびりと扇ぎ、テレビを観ている。以前から気になっていた私は、「なにも、ガムテープを貼ったうちわを使わなくても……。新しいのがあるでしょう？」とあきれると夫は、「この竹のうちわがいいんだよ。竹とプラスティックの風の違いがわかるかなあ」と意味ありげに言う。

「あら？竹なのね！」うかつな私は、うちわの骨組みが竹製なのにはじめて気づいた。近所の電気屋さんから頂いたものだ。繕ってあるのだから何年か前のものだろう。早速、本棚の隅に仕舞って（？）おいたうちわを手にとる。

竹製が2本、いづれも電気屋さんからのもので、あとの数本はプラスティック製である。すべて新しいということは、夫は3年前のうちわを使用していることになる。

改めて竹とプラスティック双方のうちわで風をおこしてみる。竹製の方が心もち風が柔らかく軽やかである。（ちなみに5gほど軽い）プラスティックの方の風は、やや重く感じられる。竹はしなりがよい手にも涼やかである。せいだろうか？持つ自然の素材がおこすものはないだろう。自然の風―これに勝る遅ればせながら私は、あたりまえのことに気づき、感動すら覚えた。

うちわというと遠い日、夏風邪で高熱を出した真夜中、うとうとしていた私が気づくと、祖母がうちわで風をおくってくれていた。そのゆっくりとしたリズミカルな空気の動きに、いつしか寝入っていた。やさしい風である。

最近では昨年の初秋、娘の出産時の初期陣痛の時のこと。病室は少し暑かった。折よく病院の近くに住む息子夫婦から「何か必要なものは？」とメールが届いた。「うちわを！」と依頼すると、すぐに2本持って駆けつけてくれた。

二刀流ではないが新前パパ（？）は、ベットで「フーッ、ヒーッ！」と唸る娘に、2本のうちわでせわしなく風をおくり続けた。こちらもやさしい風、いえ、腕力に力が籠もったひたむきな風であった。

さて、改めて新しい竹のうちわを夫に、もう1本は居間のテーブルの中央に置いた。

エコのこの夏、扇風機と共に、がんばれ！うちわ君！

竹田 朋子〈略歴〉
長野原町出身／群馬ペンクラブ会員
散文誌「せせらぎ」同人／短歌誌「遠天」同人
第55回「日本随筆家協会賞」受賞／第46回群馬県文学賞受賞
著書『風の吹く道』

レストラン 伊万利ダイン
前橋市文京町 2-20-22 群馬県生涯学習センター別館 TEL：027-224-1693

群馬県・伊香保温泉

HOTEL 天坊

政府登録国際観光旅館
ロイヤルチェーンホテル加盟店
群馬県渋川市伊香保町396-20
予約直通 Tel.0279-72-4489

東京営業所 東京都台東区東上野6-10-7金子ハイツ503 〒110-0015
Tel. 03-3843-0083

埼玉営業所 埼玉県さいたま市中央区下落合4-23-10-101 〒338-0002
Tel. 048-856-1660

●料理茶屋 湯の花亭 上州四季の懐石

春 夏 秋 冬

味わいの旅

——四つの食事処で料理が選べる



アパマン・土地建物・
店舗事務所・土地活用

ペット可

株式会社 藤田ビジネスプロモーター
http://fujita-biz.co.jp/
前橋市問屋町一丁目1番1号　027-251-4455(代)



ローンのお申し込みは、群馬銀行へ！

| 住宅ローン「金利選択プラン」 | マイカーローン | 教育ローン「仕送り名人」 |
|---|---|---|
| 選べる魅力で快適な住まいづくり | 自動車の購入・車検等に | 入学金・授業料・仕送り費用に |
| 住宅リフォームローン | 「ナイスサポートカード」カードローン | フリーローン「おまとめ太郎」 |
| ご自宅の増改築・補修・改修費用に | ホームページ・モバイルサイトからもお申込可能 | ご返済をまとめて一本化 |

詳しくは窓口または、下記までお問い合わせください。
群馬銀行ダイレクトセンター
0120-139138 受付時間 9:00～20:00
土・日・祝休日、12/31～1/3は除きます。

あなたの夢、応援します。
群馬銀行
http://www.gunmabank.co.jp/

## 編集後記

◇三陸の被災者に思いを寄せながら故吉村昭さんの『三陸海岸大津波』を読む。自ら現地を訪れ、丹念に取材をして描き出すその文章は、有無を言わせぬだけの説得力がある。ぜひ、ご一読を。
**「書物はそれが書かれたとおなじくじっくりと慎みぶかく読まれなければならない。」（ソーロー『森の生活』）**

◇7月に実施した「小中学校伝統芸能教室」の感想文が草津の子供たちから寄せられた。子供は知識・経験を真綿が水を吸い込むように身につけてしまう。（ＮＫ）

◇本誌希望の方は、送料（140円×希望回数分の切手）を添えてお申し込み下さい。また、ご要望ご意見等もお寄せください。

題字・群馬県知事　大澤正明

ⓒ 財団法人 群馬県教育文化事業団
（本誌からの無断転載、コピーを禁じます。）

上州文化
●第127号 ●平成23年8月25日発行（年4回発行） ●発行人 小見輝夫
●発行所 〒371-0801 前橋市文京町二丁目20-22 財団法人群馬県教育文化事業団
●電話 027-224-3960 ● URL http://www.gunmabunkazigyodan.or.jp/
●印刷 ㈱開文社印刷所 前橋市大手町三丁目18-7